

格助詞および複合格助詞の連体用法について

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2021-10-22 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山田, 敏弘 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12099/3689

格助詞および複合格助詞の連体用法について

山 田 敏 弘

1 はじめに

日本語学で言う格助詞は「が、を、に、と、で、へ、から、より、まで」の9つある。これらは「本とノート」「ビールにお煎餅」のような並立助詞としての用法および「101番から200番までがこの教室で受験する」のような順序助詞としての用法を除いて基本的には動詞など用言との関係を表し連用修飾の一種と考えられている。

- (1) ハンターがクマを捕獲する。
- (2) アメリカから郵便物が届く。
- (3) 図書館で資料収集をする。

(1)～(3)の格助詞「が」「を」「から」「で」は、その前接する名詞句と後続の用言との関係を表している。

連体修飾も連用修飾も基本的に一つの形式で表されるいわゆる西洋語の場合とは異なり、日本語では次の場合、「の」によって置き換わるかもしくは「の」との複合形式によって表されなければならない。

- (1)' a. 目撃されていたクマは、ハンター {の/*が} 捕獲によって山に返された。
b. クマ {の/*を} 捕獲に懸賞金を出す。
- (2)' アメリカ {からの/*から} 郵便物は入念にチェックされた。
- (3)' 図書館 {での/*で} 資料収集で時間をとられた。

このような格助詞および複合格助詞の連体形に関しては、奥津敬一郎(1996a, 1996b)に詳細な考察がある。奥津の考察は特に「インド哲学の研究をする」と「インド哲学を研究する」、「A社との契約を結んだ」と「A社と契約を結んだ」のような連体と連用の対の置換可能性についてのもので考察は広範囲に及ぶ。

以上の点をふまえ本考察で明らかにしたいのは次の3点である。

- ① 個々の格助詞の持つすべての意味・用法が同様の手順で連体化できるのか。
- ② 連用修飾の場合と連体修飾の場合では前接する名詞と後続の用言・体言との関係は同じであるか違うか。違う場合にはどのように違うか。
- ③ 複合格助詞には「に対する」と「に対しての」のように2つの連体形を持つものが存在する。これらの形式間に被修飾名詞に対する何らかの差異は見られないか。

以上の問題点を考察するにあたって、用例は適宜インターネット等から検索した実例を用い、出典は2001年11月現在のURLを示す。また、判断に揺れがある場合、アンケート調査^{注1}による数値を参考のために提示することもある。

なお、本考察ではいわゆる学校文法などで「格助詞」に含められる助詞のうち、基本機能が連用修飾であると認められない「の」「や」はここで言う格助詞には含めない。また、学校文法で副助詞とされる「まで」は「学校から家まで歩く」のように話者の主観を排除して連用修飾的に用いることができる点で格助詞の一つと考える。

2 考察の対象となる(複合)格助詞の意味・用法

9種類の格助詞の用法は多岐に渡るがとりあえず次のようにまとめられる。

が	①動作・状態の主体	太郎が走る、空が青い
	②感情等の状態の対象	読書が好きだ、英語ができる
を	①動作・状態の対象	太郎を殴る、太郎を愛する
	②通過する場所	川を渡る、グランドを走る
	③経過する時間	夏休みを海外で過ごす
	④離れる対象	大学を出る
に	⑤視覚動作の方向	下を向く、彼の方を見る
	①動作・状態の対象	友人に話しかける
	②存在場所	庭に池がある
	③到着点	学校に行く
	④受け手	妹に本をやる
	⑤変化結果	信号が赤に変わる
	⑥移動の方向	大阪に向かう
	⑦出どころ	父に本をもらう、先生に聞く
	⑧時間	5時に起きる
	⑨割合の分母	3日に1度、50人に1人
へ	①到着点	京都駅へ着く
	②方向	大阪へ向かう
で	①動作場所	図書館で勉強する
	②材料	木で人形を作る
	③手段・道具	パソコンで書類を作る

注1 2001年度岐阜大学教育学部で山田の担当する国語学各論Ⅳの受講者38名が対象。

④原因・理由	大雨で電車が止まる
⑤範囲	1時間で仕事を終える
⑥まとめ	おおぜいで夕食を食べる
⑦内容	留学のことで先生に相談する
と ①動作の対象	A国と戦争する、花子と結婚する
②共同動作の相手	田中さんと映画を見に行った
③異同の対象	本物と似ている、本物と違う
から ①起点	家から駅まで歩く、朝から晩まで
②変化前状態(材料)	しょうゆは大豆から作られる、信号が青から黄色に変わる
③判断の根拠	この結果から考えて
④遠因	たばこの不始末から火事になる
より 比較の対象	大阪は名古屋より大きい
まで 着点	家から学校まで歩く、朝から晩まで働く

「子どもにまで笑われた」のような「まで」はとりたて助詞（副助詞）として別に扱う。また、「この教室では101番から200番までが受験する」のような「から」「まで」は主語なり目的語なり連用的な文の成分の範囲を表すものとして順序助詞という扱いをするが、本考察でも簡単に触れる。

「によって」「をもって」など、複合的な形式についてはどこまでを格助詞的な機能を持つ複合格助詞として見なすかが問題となる。ここでは基本的に連用形あるいはテ形で用いられ文末の用言として述定できないことを判断基準とする。

例えば「によって」および「をもって」は、(4)のようにテ形でのみ用いられ、(5)のように文末で言うことはできないか少なくとも一般的ではない。

- (4) a. 出身地によってことばは違うものだ。
b. 十一月末でもって店を閉めます。
(5) a. ?ことばの違いは出身地による/よった/よっている。
b. *閉店は十一月末でもつ/もった/もっている。

同じ形式を取っていても意味によって複合格助詞として文法化している場合としていない場合とが見られる形式もある。

- (6) a. 研究業績に応じて研究費を配分する。
b. その歌手は観客のアンコールの声に応じてもう一曲歌った。

(6a)は次の(7a)のように文末で言うことはできないが、(6b)は(7b)のように言うことが可能である。

(7) a. *研究費の配分は、研究業績に応じる/応じた/応じている。

b. その歌手は観客のアンコールの声に応じた。

このことから(6a)の「にに応じて」は「比例・対応」などでもラベル貼りができる意味を持つ複合格助詞であるのに対し、(6b)は動詞のテ形であると考えられる。

英語の前置詞 along に相当する「ガイドラインに沿って計画を立てる」の「に沿って」は「その計画はガイドラインに沿っている」と述定できることから、日本語ではやはり複合格助詞とは認めがたいものであろう。

以上を勘案した上で、本考察で対象とする複合格助詞は次のようなものである。

に対して、について、に関して、をめぐって、によって、を通じて、をもって、において、にて、にかけて、にわたって、次第で、いかに、に応じて、にしたがって、につれて、をぬきにして、なしで、として、にとつて

「にわたって」は「宴会は3日間にわたって続いた」の場合「宴会は3日間にわたった」と言えるため純粋な複合格助詞ではないが、「岐阜県から愛知県にわたって広い地域で放火が相次いでいる」の場合、「放火は岐阜県から愛知県にわたった」とは言えないため、複合格助詞の中に入れておく。

なお、連体形を欠く次の複合格助詞については本稿の考察対象から外す^{注2}。

によると、によれば、につき、とあって、でもって、と共に、なくして、なしにまた、次の2つの複合辞のように連体形しか持たないものも考察の範囲外とする。

にまつわる、にかかわる

以下、格助詞、複合格助詞の順に見ていく。

3 格助詞の意味とその連体化の可否

3.1 連体形の形式

前節に挙げた格助詞のうち、「が」「を」については「*がの」「*をの」という形は存在せず、(1a)・(1b)'のように「の」単独で表される。

「に」についてはやはり「*にの」は存在しないが「への」の形で代用される場合がある。詳しくは以下に述べる。

その他の格助詞については名詞を修飾する場合、「での」「からの」「との」等のごとく格助詞と連体助詞が併置される形を取る。

注2 「とあって」は次のような連体用法の用例も見られるが、実際にはきわめて稀である。

(i) ハモニカ初のパンド編成。CD発売記念とあっての2曲ステージ。

(www.ne.jp/asahi/aozora/record/hamonika.html)

3.2 ガ格の連体形

ガ格はその意味・機能として動作・存在等の主体を表す、いわゆる主語の他、「好きだ」等の感情を表す用言や「できる」等の状態性を持つ用言の対象をマークすることもある。

ガ格を連体化すると「の」で必須的に置換される。

(8) a. 科学が進歩する。

b. 科学の進歩

(9) a. 田中が小林さんを殺害した。

b. 警察は(犯人の)田中の殺害の動機を追及している。

自動詞のガ格の場合、「の」での置換は特に問題は見あたらないが、他動詞の主語の場合には目的語との弁別性が解釈のしやすさ(許容度)に関与している。例えば(9b)は「(誰かが犯人の)田中を殺害した」のか「(犯人の)田中が(誰かを)殺害した」のか曖昧になってしまう。これは動作主と被動作者がいずれも人である、厳密に言えば述部の表す動作に対してそれを生起させるだけの可能性を同等に持つことによるものである。このことによって「他動詞文ではガ格名詞句が連体化しにくい」ということには、当然の事ながらつながらない(次節でヲ格の場合と併せて補足する)。

(10) a. 英語ができない田中が外国語大学を受験した。

b. 英語ができないくせに、今回の田中の受験は無謀だよ。

(10b)は文法的なレベルとして問題にはならない。

3.3 ヲ格の連体形

ヲ格については、①動作・状態の対象(太郎を殴る)、②通過する場所(川を渡る、グラウンドを走る)、③経過する時間(夏休みを海外で過ごす)、④離れる対象(大学を出る)、⑤視覚動作の方向(下を向く)という用法が挙げられるが、②～⑤までの用法については、それぞれ「川の横断」「グラウンドの走行」「夏休みの過ごし方」「大学の卒業」「下方の注視」などのように、いずれも格助詞「を」は出てこないが連体化は可能である。

問題はやはり①の場合であるが、ガ格との曖昧性が問題となる場合がある。前節では(9b)のような他動詞文に対応するガ格の連体化に対する判断についてやや許容度が問題となると述べた。しかし、今回の調査からは意外な結果が得られた。

(11) a. 田中が小林さんを公園でナイフを使って殺害した。

b. 警察は田中の殺害の動機を追及している。

c. 警察は小林さんの殺害の動機を追及している。

(11a)の場面に対して、動作主が連体化された(11b)と被動作者が連体化された(11c)

では、今回は(11b)のほうが許容しやすいという結果が得られた。(11b)は、「自然である(以下「自然」)」とするもの28名、「やや不自然だが使えなくはない(以下「やや不自然」)」というもの8名、「不自然で使えない(以下「不自然」)」としたもの1名であったのに対し、(11c)はそれぞれ14名、7名、16名と、全体的な許容度に大きな差が見られたのである。

しかし、このような許容度の差は文脈に大きく依存するようである。(11b)(11c)は「殺害の動機」と次に「動機」という語が続く。これは「殺害する動機」であって「殺害される動機」ではない。このため(11c)を次のように帰ると、少なくとも(11c)よりは許容度がアップする。

(12) 警察は小林さんの殺害の動機を追及している。

(12)は「自然」16名、「やや不自然」18名、「不自然」3名と(11c)と比べて、「自然」とした人の数においては変化があまりないが、「不自然」としたものについては大幅に減っている。

今回の調査は数量的にも小規模のものであり、断言することはできないが、少なくとも、連体化に伴って格助詞が義務的に削除されるガ格とヲ格については、「の」の前後の2名詞だけではその可否は決まらないものと考えられる。

いずれにしても「曖昧」になる可能性があれば、それを回避する方略が必要となる。それはガ格については「による」でありヲ格については「に対する」である。この点は第4節で詳述する。

3.4 ニ格とヘ格の連体形

ニ格は格助詞の中でもっとも多様な用法を持つものの一つである。その用法には、①動作・状態の対象(友人に話しかける)、②存在場所(庭に池がある)、③到着点(学校に行く)、④受け手(妹に本をやる)、⑤変化結果(信号が赤に変わる)、⑥移動の方向(大阪に向かう)、⑦出どころ(父に本をもらう、先生に聞く)、⑧時間(5時に起きる)、⑨割合の分母(3日に1度、50人に1人)がある^{注3}。

主要な用法については、場所の下位分類として、到達点(③、④、⑤)、存在点(②、⑧)、離脱点(⑦)に分けることができる。これらはその存在の場所を表す点では共通

注3 「忘れ物を取りに帰る」のような「に」もある。この「に」は動詞の連用形に付き後には移動を表す動詞が来るもので、広く動詞の連用形に付くことから考えると純粋な格助詞ではないものと考えられる。一方、「買い物に行く」「抗議に来た」など、同様の目的を表す「に」が名詞に付く場合もあるが、いずれもサ変動詞「買い物する」「抗議する」の語幹であり、連用形相当である。以上の理由から「に」は格助詞というよりも接続助詞の分類に入れられるものとする。

ちなみにこの場合の「に」は「へ」では置き換えられない。また、「*買い物へのお出かけ」のように「へ」も用いられない。

しているが、その前段階あるいは後段階としての動きの有無およびその捉え方において異なっていると捉えることができる。

その点で⑥は③に代表される到達の用法と近似しているが、その視点はアスペクト的な捉え方を敷衍すれば、将然と完了とでも言えるものとして分離される。

①動作・状態の対象はヲ格との連続性を有しつつも、③の到着点を表すもの（壁にくっつく/くっつける）や⑥の移動の方向を表すものの延長線上にあるものとして捉えられる。

では連体用法について見ていこう。

ニ格を連体化すると「*にの」とはならず「への」と別の格助詞「へ」の連体形が用いられることは既に述べた。しかし、この「へ」は単独の格助詞としては「に」の⑥および③の一部の用法しか持たない。③の一部というのは「駅 {に/へ} 着く」など「移動後の到着」という意味を持つ場合には「へ」は「に」と同様に使用可能であるが、「風呂 {に/?へ} 入る」「バス {に/?へ} 乗る」等、着点の存在が強く含意される事態ではやはり「へ」は言いにくく感じられる。

しかしながら「*にの」という形式が存在しない連体形の場合、代替形としての「への」は単独の格助詞「へ」の意味領域よりも広範囲で用いられる。

(13) a. 親 {に/?へ} 依存する。[動作・状態の対象]

b. 親への依存

(14) a. 風呂 {に/?へ} 入る。[到達点]

b. 薬湯風呂への入湯

(15) a. バス {に/?へ} 乗る。[到達点]

b. バスへの乗車

(16) a. 妹 {に/?へ} 本をやる。[受け手]

b. 妹への譲渡/手渡し

(17) a. 信号が赤 {に/?へ} 変わる。[変化結果]

b. 赤への変化

(14)の場合、「風呂」と「湯」という語彙的な近似により多少の冗長性は感じられる可能性もあるが、文法レベルでは(14a)の「へ」より許容度は高いものと考えられる。

動作・状態の対象の場合もほぼ同様であるが、やや「への」の許容度は下がる。

(18) a. 現在の日本の経済状態は80年代の英国経済 {に/*へ} 似ている。

b. ?英国経済への酷似

これはより状態的な場合であると考えられる。「依存する」は「似ている」よりもより動作的な側面が強く捉えられているものと考えられる。

移動の方向を表す場合のように、もともと「へ」で言い換えが可能である「に」の場

合には、当然の事ながら「への」でも言うことができる。到着点でも「駅 {へ/に} 到着する」に対応する「駅への到着」も可能である。

「への」で置き換えができない「に」は、存在場所と出どころの場合である。これらの用法ではもともと連用用法でも「へ」は使えない。

(19) a. 人間はこの世 {に/*へ} 存在する仮の姿だ。

b. *この世への存在

(20) a. 父 {に/*へ} 本をもらった。

b. #父への譲渡 （#は意図する意味とは解釈が異なることを示す）

「もらう」のように出どころを二格で表す受け動詞には「教わる」「借りる」等があるがいずれも「への」は用いられない（代わりに「からの」が用いられる）。

以上、まとめると次のようになる。

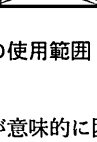
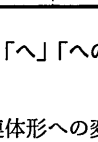
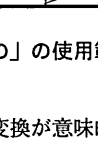
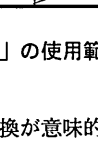
	連用用法		連体用法	
	に	へ	*にの	への
動作の方向 一般的な到着点	○	○		○
動作の対象 受け手 変化結果 慣用的な到着点	○	?		○
状態の対象	○	×		?
出どころ	○	×		×

表1 「に」「へ」「への」の使用範囲

なお、⑨の割合の分母については連体形への変換が意味的に困難であり、ここでの考察の範囲ではない。

3.5 テ格の連体形

テ格の場合、ほぼ問題なく連体形は「での」で置き換え可能である。

(21) a. 図書館で勉強する [動作場所]

b. 図書館での勉強

(22) a. 木で人形を作る [材料]

b. 木材での作成

(23) a. パソコンで書類を作る [手段・道具]

b. パソコンでの作成

(24) a. 大雨で電車が遅れる [原因・理由]

b. 大雨での遅れ

(25) a. 1時間で仕事を終える [範囲]

b. 1時間での終了

(26) a. おおぜいで夕食を食べる [まとまり]

b. おおぜいでの夕食

(27) a. 留学のことで先生に相談する [内容]

b. 留学のことでの相談

(24)のような原因・理由のデ格の場合、次の(28)(29)のような実例も多く見られるが、「による」等の複合格助詞の連体形も用いられる。

(28) そして残念なことに雨でのイラダチのせいか数名文句を言い始める人たちもいました
(www.fujitv.co.jp/jp/ftvclub/extra.html)

(29) 雨での中断は初めから覚悟してたので問題ない

(www.bsgolf.com/uspga/tourreport/usopen/usopen_04.html)

なお、3.4の(19)のように「存在」を表す場合、動詞の場合には二格を用いるが、連体用法の場合にはデ格を用いる。

(30) a. 人間はこの世 {に/*で} 存在する仮の姿だ。

b. この世 { *への/での } 存在

連用用法の「で」と「に」は、動作場所と存在場所のように「場所」を細分化してその使用される範囲が決められているのに対し、連体用法では「*にの」の代用としての「への」が着点に特化するために「での」は移動を伴わない「場所」全体をカバーすることになるものと考えられる。

3.6 ト格の連体形

ト格も連体形は「との」になる。

(31) a. A国と戦争する [動作の対象]

b. A国との戦争

(32) a. 田中さんと映画を見に行った [共同動作の相手]

b. 田中さんとの映画

(33) a. 本物と似ている/異なっている [異同]

b. 本物との類似/相異

これは「～との談話を発表した」引用の「と」でも同様である。

3.7 カラ格・ヨリ格・マデ格の連体形

カラ格とマデ格も「からの」「までの」を用いることが可能である。

- (34) a. 家から駅まで歩く。 [起点・着点]
b. 家からの通勤/散歩...
c. 駅までの通勤/散歩...
(35) a. しょうゆは大豆から作られる。 [変化前状態(材料)]
b. 大豆からの製造
(36) a. たばこの不始末から火事になる。 [判断の根拠]
b. たばこの不始末からの火事が後を絶たない。

「父からの譲渡(cf. (20b))」も起点のカラ格の一用法である。

(36b)のような判断の根拠を表す場合、「で」と同様に「による」を用いることによって意味を明確にすることもある。

- (37) たばこの不始末による火事が後を絶たない。

このような連体形の用法は、次のような順序助詞の用法でも同様に可能である。

- (38) a. 101番から200番までがここで受験する。
b. 101番からの受験室
c. 200番までの受験室

ヨリ格は文体差を捨象すればカラ格と置き換えられる部分については一般に話しことばでは「からの」が用いられる傾向が強いが、次のように「よりの」も多く見られる。

- (39) 在米日本大使館よりのお知らせ

(www.mofa.go.jp/mofaj/press/kaiken/usa/press0913__3.html)

- (40) 超伝導体よりのコヒーレント電子ビーム放出

(www.mext.go.jp/a__menu/kagaku/chousei/news057.htm)

ちなみにGoogleの検索では「よりの」が104,000件, 「からの」が3,320,000件であった。Webサイトの数だけを単純に比較するのは危険であるが傾向は現れている。

4 複合格助詞の連体形

複合格助詞として2節に挙げた「に対して, について, に関して, をめぐって, によって, を通じて, をもって, において, にて, にかけて, にわたって, 次第で, いかんで, に応じて, にしたがって, につれて, をぬきにして, なしで, として, にとって」の各形式は次のような連体形を持つ。

	[+の]型	V-辞書形態	V-タ形型
に対して	170,000	1,910,000	3,270
について	2,300,000	-	-
に関して	202,000	3,040,000	11,000
をめぐって	64,500	331,000	717*
によって	12,600	6,930,000	21,200*
を通じて	44,500	-	87,700
をもって	2,900	-	-
において	51,200	-	-
にて	32,400	-	-
にかけて	139,000	-	少
にわたって	6,310	255,000	-
次第で	135	-	-
いかんで	33	-	-
に応じて	3,230	-	223,000
にしたがって	220	-	4,920
につれて	347	-	268
をぬきにして	8	-	115
なしで	6,650	-	-
として	1,890,000	-	-
にとって	287,000	-	-

表2 複合格助詞の連体形

[+の]型とは「に対して」であれば「に対するの」のように複合格助詞に「の」を付加したもの、V-辞書形態は「に対する」のような形でこれは動詞に由来する形式のみが形を持つ。右端のV-タ形型は「に関した」のような連体形である。

表2にはそれぞれの形式について、2001年11月2日にインターネット検索エンジン Google を用いてヒットしたサイトの件数を参考として載せておいた。この数値がすべて正確な用例数というわけではないであろうが、全体的な多寡を概観するには十分な数字であろう(インターネット検索の問題点については田野村忠温2000参照)。

なお、右肩に「*」を付けた数字は、当該の数字に一定割合以上の不適当な例が含まれる場合を示す。たとえば「をめぐった」は「お寺をめぐった」のような本動詞のタ形も含まれている。それを斟酌した上で数字を見る必要がある。また、「-」を付けたところは、当該形式が存在しないか、検索エンジンで一定の数字が出てまったくと言っていいほどここで意図した用法の形式が含まれていない場合である。「少」はわずかな例が観察されたことを示す。詳細は以下の小節で見えていくことにする。

4.1 「複合格助詞+の」による連体形のみを持つ複合格助詞

表2を概観して分かるのは[+の]型のみを持つものが多いということである。ただし、

表2には動詞のテ形に由来しない「にて」「次第で」「いかに」「なしで」が含まれているため、形式の多寡をここで問題にしても意義があることとは思われないが、少なくとも複合格助詞の連体形に関しては「の」を単純に付加して得ることが一般的である。

さて、このような複合格助詞には、上に挙げた動詞のテ形に由来しないものを除いても「について」「をもって」「において」「として」「にとって」がある。これらは動詞の辞書形およびタ形が形式としては想起されるにも関わらず、実際には連体形として用いることはできない。

(41) 国語史に {についての/ *につく/ *についた} 考察を行う。

(42) 当月の末日 {をもっての/ *をもつ/ *をもった} 解約となります。

(www.reset.jp/qa/cancel.html)

(43) アフガニスタン {においての/ *におく/ *においた} 救助活動

(44) 人間 {としての/ *とする/ *とした} 尊厳

(45) 自分 {にとつての/ *にとる/ *にとった} 価値

「にかけて」は、名詞を修飾する場合、[+]型の「にかけての」が圧倒的に多く用いられるが、次のようなV-タ形型の「にかけた」も少数であるが、観察された。

(46) gallery 文楽・ニュース：昭和から平成にかけた文楽界の“牽引者”だが、
「偉うなると思うてなったんやない。鼻タレも次第送りです」と、どこまでも謙虚だ。
(osaka.yomiuri.co.jp/bunraku/news/001025.htm)

このように複合格助詞自体は変化せず、「の」を付加することで連体形を表すのは、他の格助詞との近似性を認めることができる点である。言い換えれば、このような複合格助詞にはすでに語源としての動詞は意識されない文法化の進んだものである。

「について」は[+]型の連体形のみを持つが、同様の意味を持つ「に関して」は「に関しての」他V-辞書形型の「に関する」やV-タ形型の「に関した」も持つ。このことから連体形のバリエーションの多寡に述部や前に置かれる名詞との意味関係は関与していないものと考えられる。

4.2 V-辞書形型・V-タ形型を持つ複合格助詞

前節で述べたように、[+]型のみならず、V-辞書形型もしくはV-タ形型で名詞を修飾するということは、少なからず動詞としての性質を残しているということである。

そのうち、V-辞書形で表すことができるのは、「にに対する」「に関して」「をめぐって」「によって」「にわたる」である^{注4}。このうち、「にわたる」を除いた他の形式はV-タ形も同時に連体形として用いる。

注4 これらが漢字で書かれることが多いのも、このような語源意識と無関係ではないであろう。

さて、このような2形以上を持つ場合にはその使い分けが問題となる。「に対しての」と「に対する」「に対した」は被修飾名詞との関係においてどのような分布の違いを見せるのであろうか。

(47) 地震に対しての心構え

(web.pref.hyogo.jp/syoubou/i/news/hokubujishin/kamae.html)

(48) 白神山地の管理計画に対しての日本自然保護協会沼田会長メッセージ

(www.jomon.ne.jp/~misago/m_kyokai.html)

(49) 親の幼児に対する教育について。 1歳5ヶ月 女児 (質問者:母)

(www.intership.ne.jp/~children/soudan/q_a/200107/20010713.htm)

(47)～(49)に見られるように、特に(49)のように「の」が近隣環境に存在する場合の重複印象を除いて、「に対しての」と「に対する」は相互に置き換えても意味は変わらない。

一方、「に対した」には次のような例文が観察される。

(50) モバイルの統合環境の構築に応用が可能になり各企業のシステムに対した悩みを解決してくれます (www.openbiz2000.com/jp/product.html)

(51) 「岐阜県の散歩道」ふれあいサロン。2001年後半期の経済展望に対した設問

(www.g-web.com/fureai/)

(50)(51)も「に対しての」「に対する」で言い換えてもまったく自然であり、意味も変わらない。

しかしながら、次のような場合には「に対しての」と「に対する」では微妙な差異を生じる(実例は平仮名漢字交じりで、作例は片仮名漢字交じりで示す)。

(52) ウシ由来SCF {に対する/?ニ対シテノ} モノクローナル抗体とそれを用いた定量法

(ss.niah.affrc.go.jp/patent/scf.html)

(53) 悪性脳腫瘍 {に対する/?ニ対シテノ} 中性子捕捉療法

(tokyo.cool.ne.jp/tokyo/1849/)

(52)(53)は被修飾名詞が「抗体」「療法」という動作性を持たない名詞である。この場合、やはり「に対する」のほうが相対的に自然に感じられる。

このことはアンケート調査からも裏付けられた。

(54) 去年一回引いたので、インフルエンザ {a. に対する/b. に対しての} 抗体を持っている。

(55) 悪性脳腫瘍 {a. に対する/b. に対しての} 放射線療法の研究

(54a)は「自然」33名、「やや不自然」5名、「不自然」0名、(55a)は同じく、36名、2名、0名であったのに対し、(54b)は、24名、10名、4名、(55b)は21名、14名、3

名という結果が得られた。被修飾名詞が動作的な名詞（いわゆる動名詞）である「家族に対しての暴力」が31名，7名，0名であったことと比較すると，相対的な許容のされやすさに差が見られると言ってよいであろう⁵。

「に関して」「をめぐって」については，もともと内容を表すため被修飾名詞は動作や変化を含意しないものが多い。そのため形式による意味の違いは特に見られない。

「によって」は「バスによって代行輸送する」（手段），「地震によって倒壊する」（原因・理由），「聖徳太子によって建てられた」（受身の動作主），「人によって態度が変わる」（基準）などの用法を持つ。「によっての」は4用法すべてに用いられる。

(56) CD-Rドライブによっての音質焼きメディア[手段]

(abilitycdr.virtualave.net/oscilloscope/ozoozo/)

(57) ADC管理者の判断によっての発言の削除に対し，一切意義を申し立てません。
[動作主] (adc.doshisha.ac.jp/adckiyaku.html)

(58) 浜松技術センターの協力により科学的に風あいを損なうことなく，日光によっての退色を抑える事に成功しました。[原因・理由]

(www.siz-sba.or.jp/takuminokai/aizome/taishoku.htm)

(59) 人によっての感じ方 同じことを聞いて，同じものを見ているのに，同じことを考えているとは限らない。[基準]

(www.katakuri.sakura.ne.jp/~ngc/seisin/nitijo/kanjikata.html)

「による」は(51)～(53)については置き換えられるが，変化の基準の用法については置き換えにくく感じられる。

(60) ?人による感じ方

次例も同様である。

(61) 音楽は抽象的だけど，映画はセリフや動作，美術があってすごく具体的だと思うんです。それぞれ {によっての/?ニヨル} 良さがあるから，それにあった世界観を表現していきたいな。

(www.feels-eye.com/quartet/kokodake.htm)

注5 次のような「に対する」の場合にも「に対しての」と置き換えにくい。

(ii) Nimdaワームに対するお願い。2001年9月21日。お客様各位。富士ゼロックス株式会社

(www.fujixerox.co.jp/release/2001/0921-nimda.html)

(iii) システムに対する教育・訓練の徹底及び現状と相違する部分の教育・訓練を全従業員に行ってください。

(www.jet.or.jp/iso/iso9000/suggest.html)

通常，「に対する」は修飾されている名詞「お願い」の内容を表さない。このような場合，「に関する」のほうが一般的である。

このような「内容」を表すと考えられる「に対する」の場合，「ワームに対してお願いする」は「ワームにお願いする」意味となり，より不自然であると考えられる。

「によった」はGoogle検索では「～によった場合」が最も多く、数百例当たっても、意図する用法で使われているのは非常に少ない。このような頻度の違いはあるが、それぞれの意味で「によった」も用いられている。

- (62) 明るい感じのする長音階によった長調と暗い感じのする短音階によった短調に別れる。[手段]

(www.econ.nagasaki-u.ac.jp/info/club/nemc/h.html)

- (63) 進化論学説は唯物主義者のユダヤ系学者によった邪智と作為によった妄想に近く、その矛盾は複数の学者から指摘されています[動作主]

(www.geocities.com/Tokyo/Flats/7215/h7.html)

- (64) 水和熱によった細かな亀裂は、ゲル(Gel)現象の自體治癒作用で一定其間が過ると自然に止る。[原因・理由] (www.altong.co.kr/altong_jp_6.htm)

- (65) 浄剤の成分規格試験 食品、添加物等の規格基準 (昭和34年厚生省告示第370号) の第5のA洗浄剤の成分規格によった分析試験 [基準]

(www.yorozuya-online.gr.jp/formula/bunseki.htm)

5. 連用形と連体形の分布の相異

連体形は連用形とそれぞれ体言、用言という異なる品詞を修飾するという機能上の異なりの他、その被修飾名詞に対する制限についても異なりを呈する。このような異なりについては、すでに山田敏弘(2001:16,24)で指摘したことであるが、もう少し考察を深めておく。

- (66) *母親は子どもに対して愛した。

- (67) *不良グループはA君に対して殴った。

「に対する」は通常、格助詞の「に」と置き換わるものの、その動作の及び方は非接触に限定される。そのためヲ格を取る「愛する」や「殴る」のような明らかに接触する場合には、「に対する」を用いて表すことは不自然である。

しかしながら、これらを連体形で言うとう適格になる。

- (68) 母親の子どもに対する愛

- (69) 不良グループのA君に対する殴打

このように連体形では連用形に見られるような非接触や格に対する制限が緩和される。これは連体形であることによって被修飾名詞はすでに特定の格形式を要求しない存在となっており、より広く「対象」を捉えていることによるものと考えられる。

また、「によって」は手段を表す場合、やや硬い文体で用いられる。そのため次のようには普通、言わない。アンケート調査の結果と共に示す。数字は順に「自然」「やや不自然」「不自然」である。

(70) ??太郎くんはバスによって町へ出かけました。(3, 11, 24)

しかしながら、次のような連体形では(70)ほど不自然には感じられない。

(71) 太郎くんはバスによるお出かけを楽しみにしていました。(18, 12, 8)

これは被修飾名詞の文体差だけの問題ではない。むしろ、手段のような場合、通常用いられる格助詞「で」を選択せず重い形式である「によって」を用いるにはそれなりの動機が必要である。それに対して(71)のような場合、もちろん「での」でもよいが、「による」との文体差は連用形の場合ほどではなく、より近接しているものと考えられる。

もう一つ、これは連体形だけの問題ではないが、受身の動作主について見ておく。

受身の動作主をカラ格で表す場合、九州方言などを除き、非接触でなければならないという制限がある。

(72) *田中から殴られた。

しかし(72)は次のように連体形にするとカラ格を使うことが許容される。

(73) 田中からの殴打で大けがをした。

これは実は、「田中から殴打を受けた」という形で言うことも可能であり、連体形特有の現象ではない。しかし、名詞が介在する場合に動作の非接触という制限が緩和される点では「～に対する」に類似した特徴を持つ。

6. おわりに

以上の考察をまとめると次のようになる。

- ① 連体用法では前後の名詞が連用用法よりも意味の点で単純な対応をしている。

「への」は「*にの」が用いられないことによって連用的な「へ」がカバーしない着点までも表すことができる。一方で動きのない存在場所を表す「に」の領域は連体用法では「での」で表される。

- ② 連体用法では連用用法よりも広い関係を表すことができる。

連用用法では非接触の場合に限定される「に対する」は、連体用法では接触の場合にも使用可能である。格助詞「から」も同様の意味関係の広がりを連体用法において持つ。

- ③ 2つ以上の連体形を持つ場合、微細な違いを除き、ほぼ用法に差はない。

ただし、動作・変化の意味を含まない純粋な名詞を修飾する場合、[+の]型よりもV-辞書形型による修飾の方がより自然であることもある。

本考察では奥津(1996a, b)において考察されている連用用法と連体用法の意味の差は考察外に置いた。また、揺れがある箇所に限って数量的な調査を補助的に示した。機会があればより広範囲に数量的な調査結果も併せて考察したい。

【参考文献】

- 奥津敬一郎(1996a)「連体即連用?～第7回 機能動詞文その三」『日本語学』15-5
- 奥津敬一郎(1996b)「連体即連用?～第8回 機能動詞文その四」『日本語学』15-6
- 田野村忠温(2000)「電子メディアで用例を探す～インターネットの場合」『日本語学』19-6
- 山崎誠・藤田保幸(2001)『現代語複合辞用例集』国立国語研究所
- 山田敏弘(2001)「§2～§5 格助詞(1)～(4)」庵・高梨・中西・山田『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク